様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：５７７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６２７

研究課題名（和文）奄美群島における在地伝承から創建された神社に関する宗教学的研究

研究課題名（英文）A Religious Study on the Shinto Shrines Being Created from Oral History in the Amami Archipelago

研究代表者
町　泰樹（MACHI, TAIKI）

鹿児島工業高等専門学校・一般教育科・講師

研究者番号：３０７２５６９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、奄美群島北部（笠利・龍郷・名瀬）における在地の伝承をもとにした神社の創建と継承に着目し、地域社会が神社を受容する上で、現地の宗教文化がどのような役割を果たすのかを明らかにする。具体的には、神社の巡検やインタビュー、文献資料の収集を通して、奄美群島の神社が地域で受容されるうえで、ユタのシャーマニズムやノロ祭祀、祖先崇拝といった現地の民俗文化が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：　In this study, focusing on the creation and succession of the shinto shrines based on the oral history in the northern part of the Amami archipelago (Kasari, Tatsugo and Nase), I investigated the role of local religious culture in acceptance of the shinto shrines. Specifically, through the shinto shrine inspections, questionnaires and collection of historical archives, I clarified that the local folk cultures such as shamanism of Yuta, Noro ritual and ancestral worship play important role in the local acceptance of the shinto shrines.

研究分野：宗教人類学

キーワード：奄美　神社　伝承　民俗信仰　ユタ　ノロ祭祀　伝承創建神社　継承

１．研究開始当初の背景

戦後の宗教学において、神社とナショナリズムとの関係を問う研究は、村上重良の国家神道研究（村上 1970）を念頭において展開されてきた。国家神道を神社神道と国体論や皇室祭祀と関連付けながら総合的に理解する村上の国家神道論に対して、それを批判的に継承する立場（島薗 2010）と、神社神道を国家制度のなかで綿密に検証する対立的な立場（葦津 2006=1987、阪本 1994、など）があり、現在でも学説史上の対立を示しながら研究が蓄積・展開されている。

そのような状況のなか、明治期以降の神社政策を、地域レベルでの神社神道の受容過程から検討することで、地域社会の担い手レベルから制度史的研究を捉え返そうとする研究が提出されている（畔上 2009）。しかしながら、地域内在的な視点から国家神道を捉えようとする研究は開始からまだ間もなく、多様な地域における事例研究が求められている状況にある。

このような学術的背景のなかで、奄美群島の事例は、もともとの宗教体系や文化体系が本土と異なっていたことから、宗教政策がより先鋭化して展開されており、宗教政策の地域的な現れ方の違いを把握するうえで有意義なデータを得られる可能性が高い。

研究代表者である町は、2008 年から現在まで、奄美群島・与論島の葬制の変化について継続的な現地調査を行なってきた。その結果、明治期の国家レベルでの宗教政策によって、ユタのシャーマニズムやノロによる村落祭祀といった土着の民俗信仰を抑圧しながら神社神道が導入され、葬儀も神葬祭の形式で行われるようになったことを明らかにしてきた。そのような歴史がありながらも、与論島の人々は現行の葬儀や神社に関する違和感を示すことがほとんどない。

この知見から、地域における宗教や民俗の変容を国家との関係のなかで理解し、同時に国家レベルでの宗教政策を人々が内面化する過程を明らかにする必要があると考えている。具体的には、近代以降に外部から導入された神社神道と、在地の伝統的な宗教文化との関係を系譜的に明らかにする必要があると考えている（町 2013）。また、与論島における個別研究を、奄美群島という地域レベルでの体系的な研究へと発展させるために、群島内他地域への調査地域の拡大が必要であると考えている。

２．研究の目的

本研究では、奄美群島における土着の伝承をもとにした神社の創建と継承に着目し、地域社会が伝統的な宗教文化を近代日本のまなざしに沿う形で見直し、神社へと接続していくダイナミックなプロセスを明らかにすることを目的としている。

限られた研究期間で奄美群島内すべての神社を網羅することは不可能である。そのため、本研究では調査地域を奄美大島北部に限定する（地図１参照）。これは奄美大島北部に、奄美大島の開闢神話（阿麻弥姑神社）や英雄伝説（大親神社）や平家落人の伝説（平行盛神社・平資盛神社）を由緒とする神社が所在しているためである。

地図1：大島北部位置図

上記の神社について、地域の担い手（神主ないしは管理者、氏子）から、ファミリーヒストリーの聞き取りを含むインタビュー調査を実施する。それにより、神社創建の由緒にとどまらず、土着の伝承や神社を近代以降のダイナミックな社会状況下において維持する価値意識の見取り図（土着の英雄の顕彰や祖先崇拝、等）を明らかにすることになる。

また、あわせて郷土誌や地元新聞紙における神社の記述を収集・整理することで、インタビューデータを補足しつつ、土着の伝承をもとにした神社が国家との関係においてどのように位置づけられてきたのかを明らかにする。

奄美群島の神社に関する研究は、戦後の九学会連合の総合調査によって先鞭がつけられたものの、その後のフィールド調査の成果としては、神社祭祀の調査報告等の散発的な段階にとどまっているのが現状である。その背景には、歴史資料の乏しさという問題がある。本研究では、神社関係者のファミリーヒストリーの聞き取りと文献研究を組み合わせることによって、歴史資料の乏しさという問題を解決することを課題としている。

３．研究の方法

土着の伝承をもとに創建された神社の創建・継承を把握するために、本研究では、調査地域を奄美大島北部に限定し、研究方法として、下記のとおりフィールドワークと文献研究を組み合わせる手法を採用した。

フィールドワークでは、神社の創建と維持に関するデータを収集するために、1．神社の担い手へのインタビュー調査、2．地元新聞紙の記事収集及び資料整理を行うことと

した。文献研究では、明治期における宗教政策のインパクト及び神社神道の導入過程を把握し、インタビュー調査の裏付けと補完のために、3．郷土誌や歴史史料に基づく文献研究を行こととした。

研究遂行に際しては、年度ごとの成果目標を、以下の通り設定し、進捗状況を丁寧に確認しながら研究を進めることとした。

平成 27 年度（初年度）：パイロット的現地調査の実施・新聞記事および文献の収集・整理。
平成 28 年度（2 年目）：現地調査の実施とインタビューデータの整理、新聞記事・文献の分析。
平成 29 年度（最終年度）：インタビューデータ・新聞記事・文献の総合的分析、および成果発表。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

本研究では、当初、土着の伝承から創建された神社に焦点をあてる予定であったが、奄美群島の神社全体のなかにそれらの事例を位置づける必要があったため、調査対象地域である奄美大島北部の神社について、網羅的に巡検を行い、神社内の記念碑調査および神社に関する郷土誌等の記述を整理することとした。

その結果、薩摩藩から派遣された代官によって創建された神社であっても、記念碑等を通じて地域の歴史や偉人を顕彰する役割を果たしていることが明らかとなった。

また、伝承から創建された神社に関しては、当初想定していた、神社創建の由緒と密接なかかわりをもつ特定の家や親族が神社の維持管理を担っている事例（与論島の按司根津栄神社）以外にも、地域住民が個人的な事情（病気の治癒等）によって創建した神社が、地域レベルの宗教生活（戦時下での戦勝祈願）と接続されることで地域に定着するようになった事例（奄美大島名瀬の龍王神社）や、島外居住者の宗教的経験（夢でのお告げ）が神社創建の機縁となっている事例（奄美大島笠利の大屋神社）などが確認できた。また、こうした神社の創建においては、いずれにおいても霊的資質を備えたシャーマン的人物が関与していた。

こうした資料から、奄美群島の神社は、当該地域において外来宗教としての性格が強いが、それが地域住民に受容されるうえでは、シャーマニズム（ユタ）やノロ祭祀、祖先崇拝といった現地の民俗信仰の枠組みにしたがって受容されていることや、そうした民俗信仰をベースとして平成以降にも新たな神社（先述の大屋神社）が創建されていることが明らかとなった。

また、調査をすすめるなかで、1952 年に奄美博物館が実施した調査の報告書である「社寺仏閣調査報告」を確認できた（鹿児島県立図書館奄美分館所蔵）。当該報告書には、郷土誌には記載されていない神社や小祠の情報も記載されており、こうした資料をもとに、報告書に記載された神社と現存する神社とを比較することができた。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

奄美群島の神社という研究テーマは、これまで散発的に展開されるにとどまってきた。その理由として、民俗学の分野では神社が外来宗教と位置づけられ、宗教学の分野では文献史学的な神社研究が中心的であり、歴史史料の乏しい奄美群島の神社は対象となりにくかったという点が考えられる。

本研究では、奄美群島の神社について、外部から導入された神社を民俗信仰といった地域の論理で受容していることを指摘することで、民俗学と宗教学の両分野を架橋することができたと考えている。外来宗教を受容する際の民俗信仰の働きについては、仏教やキリスト教、新宗教といった他の外来宗教にも共通しうる点であると考えられる。そのため、こうした外来宗教の導入や受容、継承過程について、それぞれを研究テーマにしている他の宗教学者・民俗学者などと共同研究を進めていくことができるだろう。

また、これまで散発的に行われてきた研究に対して、奄美北部という限定された地域ではあるが、すべての神社を巡検したことによって、今後の総合的な研究の基礎固めができたと考えている。奄美群島においては、仏教やキリスト教についてはすでに体系的な研究が提出されているが神社や神道関連ではまだそういった研究がなく、今後体系的な研究へと進めていきたい。

明治維新期や戦前戦中の神社政策と実際の様子については、国内のみならず国外の研究者の関心も高く、「東アジア宗教研究フォーラム」にて口頭発表を行った際には、朝鮮半島や沖縄（琉球）における神社の導入・受容状況について研究を行なっている海外の研究者と情報交換を行うことができた。

(3)今後の展望

本研究を通して、奄美群島の神社を民俗信仰との関係性において理解するための枠組みが設定できた。

とはいえ、こうした民俗信仰の枠組み自体も、歴史の影響を受けながら変容していることが今回の研究では示唆されている。そのため、今後は、個々の神社について、神社の来歴や担い手の来歴をファミリーヒストリーの聞き取り等を通じて明らかにしていく必要があると考えている。この点は、今回の研究において当初予定していた内容であるが、研究内容の変更によって実施できなかった点であるため、今後取り組んでいく予定である。

また、今回の研究では、奄美大島北部の神社に調査地を限定していた。しかしながら、加計呂間島を含む奄美大島南部には、ノロ祭祀と結びついた神社（小祠）が複数あることが知られている。今後、調査地域を拡大し、奄美群島北部の知見が奄美群島全体に適用可能かどうかを見極めていく必要がある。

【参考文献】

葦津珍彦（阪本是丸註）2006=1987『新版 国家神道とは何だったのか』（神社新報社）

畔上直樹　2009　『「村の鎮守」と戦前日本―「国家神道」の地域社会史』（有志舎）

阪本是丸　1994　『国家神道形成過程の研究』（岩波書店）

島薗進　2010　『国家神道と日本人』（岩波書店）

町 泰樹　2013　「奄美・与論島における神職のライフヒストリー―成巫・伝承・系譜の結節点としての神社―」『西日本宗教研究誌』、第１号、pp.24-43。

村上重良　1970　『国家神道』（岩波書店）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

1．キース・カマチョ（著）／西村明・町泰樹（訳）、「忠誠と解放」、『思想』2015 年第 8 号（第 1096 号）、岩波書店、2015 年 8 月、pp.188-213 。 Keith L Camacho, *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory, and History in the Mariana Islands* (Honolulu: University of Hawai ’i Press, 2011) のうち、第 1 章 ”Loyalty and Liberation ” の邦訳。

〔学会発表〕（計 9 件）

1．町泰樹「奄美群島における神社と民俗信仰」、第 2 回東アジア宗教研究フォーラム、関西大学、 2018 年 2 月 25 日

2．町泰樹「奄美群島の神社と民俗信仰との関係をめぐる研究にむけて」、 日本宗教学会第 76 回学術大会個人発表、 東京大学、2017 年 9 月 17 日

3．町泰樹「奄美群島における明治期の宗教・衛生政策の影響」、 第 2 回人文社会科学セミナー、 奄美市立博物館（鹿児島県奄美市）、 2017 年 8 月 29 日

4．町泰樹「調査者と被調査者とのギャップ」、西日本宗教学会第 7 回学術大会トークセッション「〈宗教の現場〉との向き合い方」、鹿児島大学（鹿児島県鹿児島市）、 2017 年 3 月 25 日

5．町泰樹「奄美の神社ことはじめ」、 第 1 回人文社会科学セミナー、 鹿児島工業高等専門学校（鹿児島県霧島市）、2017 年 2 月 17 日

6．町泰樹「離島の文化と社会変動―鹿児島県与論島の葬制の変容から―」、技術士会九州支部 CPD「かごしま技術 21」（鹿児島県技術士会主催）、鹿児島市よかセンター、招待講演、2016 年 4 月。

7．町泰樹「与論島における葬制の変容」、鹿児島民俗学会 、 鹿児島県歴史資料センター黎明館（鹿児島県鹿児島市）、 2016 年 3 月 27 日

8．町泰樹「鹿児島県与論島における葬制の変容をめぐる文化人類学的研究」、平成 27 年度後期鹿児島大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程地域政策科学専攻学位申請論文発表会 、 鹿児島大学（鹿児島県鹿児島市）、 2016 年 2 月 13 日

9．町泰樹「国民国家形成期における包摂と排除―鹿児島県与論島における宗教文化の変容を事例として―」、 鹿児島哲学会、鹿児島大学、 2015 年 6 月 6 日

〔図書〕（計 1 件）

1.キース・L. カマチョ（著）／西村明・町泰樹（訳）『戦禍を記念する―グアム・サイパンの歴史と記憶―』岩波書店、2016 年。Keith L Camacho, *Cultures of Commemoration: The Politics of War, Memory, and History in the Mariana Islands* (Honolulu: University of Hawai ’i Press, 2011) の邦訳

〔その他〕（計 1 件）

1．町泰樹、「鹿児島県与論島における葬制の変容をめぐる文化人類学的研究」、平成 27 年鹿児島大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程地域政策科学専攻（学位（博士（学術））申請論文）、人社研第 31 号、2015 年 3 月、201 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

町　泰樹（MACHI TAIKI）

鹿児島工業高等専門学校・一般教育科・講師

研究者番号：30725693